

「過去に目を閉じるものは現在にも盲目である」

ドキュメンタリー映画(2017年)『原田要 平和への祈り～元ゼロ戦パイロットの100年～』制作にあたり

映画監督:宮尾哲雄
1950年長野県須坂市出身
元長野放送(NBS)報道局長



原田要さんに初めてお会いしたのは、NBSを退職した2014年に須坂市で開かれた講演会でした。原田さんは、すでに98歳のご高齢でしたが、自分が体験したつらい戦争体験を、何とか集まった人たちに伝えようと、2時間近く立ちっぱなしで、気迫に満ちたお話をされました。

その後、長野市内のご自宅に何度も伺い、原田さんへのインタビュー、カメラ撮影をさせていただきました。最初から映画製作ということ念頭にあったわけではなく、原田さんの戦争体験、生の証言を、お元気なうちに、とにかく記録に残したいと思ったのです。今、だれかが記録しておかなければ、戦争とはどういふものなのか、忘れられて、歴史に埋もれてしまうという危機感がありました。原田さんは、とても素朴で誠実な方で、私はその人柄にもすっかり魅了されました。

戦後生まれの私には戦争体験はありませんが、両親は戦争のさ中に青春時代を過ごしました。父親は太平洋戦争開始後間もなく、21歳のときに軍人を志願し、陸軍に入隊しました。それから昭和21年に復員するまで4年余り、中国やインドシナ半島で従軍しました。親父は酒を飲むと、軍隊や戦争の話をよくしましたが、私はあまり聞きたくありませんでした。「この民主主義の時代に、そんな昔の、軍国主義時代の話は嫌だ」と思ったのです。若い頃の私には、今の時代が過去の時代と分かちがたく結びつき、つながっているという歴史認識が不足していたのだと思います。両親が他界した今になれば、親父の元気なうちに、戦争とはどんなものか、もっと話を聞いておけばよかったと後悔しています。

この映画は2017年の夏、長野市権堂の老舗映画館「長野相生座・ロキシー」でのみ公開されました。翌年には長野県内5つの映画館に上映が広がり、さらに全国各地の団体や学校などが自主上映会を企画し、今日に至っています。予想外の大きな反響を大変うれしく思っています。

映画製作で一番むずかしかったのは、原田さんの行動や考えの意味をしっかりと理解することでした。

原田さんはなぜ、17歳で名門の旧制中学を中退して軍人の道にすすんだのか？

戦後半世紀近く経って、75歳になってから戦争体験を語りだしたのはなぜか？

原田さんの考えをしっかりと理解するためには、それぞれの時代の、法律や情報、教育、統治システムが、



どうだったのか、時代背景をよく知る必要があると思い、当時の写真や資料、証言などをたくさん集めて、人々の暮らしを出来る限り正確につかみ、事実を捻じ曲げたり、誇張したりしないように心がけました。

原田さん99歳の誕生日に「人生で楽しかったことはなんですか？」と質問すると、こう答えました。

「自分には青春時代も、戦中も、戦後も何ひとつ、楽しい思い出は無い。生きているのが苦しいだけの毎日だった。こんな辛い人生を送ることになったのは戦争のためだ。よく『反戦を訴える元ゼロ戦パイロット』と新聞で

紹介されるが、自分の気持ちとしては『戦争反対』というような生易しいもんじゃない。戦争ほど人道に反した罪悪はない。戦争が憎い！」

これは実際に戦闘を体験した人でなければわからない、原田さんの実感だったと思います。

戦後の日本は、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の3つを柱とする新憲法を制定しました。もう戦争はしないと憲法にうたい、日本は軍国主義から「民主主義」の国になったと学校で教えられました。戦後75年が経ち、本当に日本は憲法の理念に基づいた、平和な国になったのでしょうか？ 戦後民主主義の内実が問い直されているように思います。人はいつの時代も、その時代とともに生きています。今の時代を理解する上で、過去の歴史を知り、学ぶこと、教訓にすることは非常に大事だと思います。

日本の総理大臣も、各国の指導者も口をそろえて「平和が大切」と力説しますが、各地でテロや武力衝突、核の脅威が絶えません。国や思想、信条、宗教などの違いを認め合い、軍事力ではなく、外交の力で戦争を回避する政治が今こそ求められていると思います。「戦争のない、平和な世界を何とか築いてほしい」というのが原田さんの遺言でした。私たちひとりひとりに課せられた”宿題”だと思います。

今、テレビや新聞、インターネットに情報があふれていますが、事実はどうなのか、本当のことを知るために身に付けなければいけないのが「メディア・リテラシー」(メディアからのメッセージを主体的・批判的に読み解く能力)です。情報をうのみにせず、誰がどんな意図で送りだしているのかを見極める。そして、自分の頭で考え、判断する力を身につけることが、ますます重要になっていると思います。

物事は何でも大変複雑です。どの角度から見るかによって、見え方が違って来る。「イエスカ、ノーカ」というような単純なものではない。まして、国と国との争い、戦争のような出来事になると、全体像はそう簡単につかめるものではありません。

この映画がひとつのきっかけとなり、戦争と平和について考え、未来を冷静に判断する上で参考になれば、映画を作った意味があると思っています。(文責 宮尾哲雄)